ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

<9>

工法変えず拡幅

時は文明開化の世

北都留郡長が自負

架け替えの記録 ④

明治の架け替えで、猿橋は拡幅された。嘉永までの橋は桔（はねき）が二本並び、それが三本並びになった。幅は十一尺（約三・三㍍）から十八尺（約五・四㍍）に広がった。が、木造の奇構は継承された。

当時の北都留郡長、佐倉達山（本名・孫三）が、「猿橋記」という一文を残している。

「掛替を終わって　唯その美觀を尽さざるを恐る。当今鉄石の工ありといえども、この橋依然旧制を改めざるは　迂拙（うせつ）に似てさにあらず（中略）この橋奇を求めずして自ら奇なり（中略）故に古態を存して永く行客をして古を徴して今に觀がしむ　是所謂（いわゆる）一挙両得也」。

時は文明開化の世。すでに鉄橋技術があったが、橋の奇構そのものに価値があるとして、工法を変えなかったことを自負している。この人、なかなかの文人郡長だったと見え、地元には書や詩文が残っている。

達山の心意気は、その後も引き継がれた。終戦直後の昭和二十四年から三年間にわたった架け替え。すでに当時、猿橋は国の名勝指定（昭和七年）になっていたが、隣に新猿橋（同九年）が完成、甲州街道の要所としての役目を終えていた。が、地元の人は、この奇橋を捨てなかった。

当時、猿橋町総務課長として架け替けに奔走した田中福次郎さん（六九）（大月市猿橋町）が語る。

「長い間の酷使で桔や欄干が腐れ、自然落下の危険さえありました。混乱と貧困の時代でしたが、見るに見かねて架け替えに踏み切ったものです」。

国、県の補助金やら地元の寄付金で五百万円余の費用は工面できた。が、もう近在の山は枯れ、ケヤキの大木などどこにもなかった。やむなく秋田杉を使うことになり、当時の中西建治町長（故人）と田中さんが、秋田・角館の日月神社に出向いて御神木の払い下げを交渉した。

「千数本の巨木が猿橋駅に着いた時、地元はもう大変な騒ぎ。稚児行列まで繰り出したものです」。田中さんは懐かしそうに振り返る。

工事も大変だった。設計を担当した県文化財保護審議委員の広瀬浄（いずみ）さん（七四）（韮崎市在住）が語る。「橋の資料といえば、安藤広重の絵くらいしかない。本当の形がわからない。仕方なく明治の橋を忠実に再現しました」。

名勝・猿橋が、戦車も通る時代の姿のままで残されたのは、こんな事情があった。

苦しい時代の架け替えを思い、感激深い田中福次郎さん